



2012・10

SORA 45号

稲の花

柴田 佐知子

信ずるに足るは闇ぞと山椒魚
紅を刷く母に見とるる日焼の子
用のなき時に出てくる道をしへ
蟬捕りにゆく作文の出来ぬまま
叱らるる子の手には蟬がちよつと鳴く
箸止めて父が見てゐる白雨かな
黒潮を見る万緑の高みより
遠泳のひとりづつ打ち上げられし
セルを着て父は終日夢のごと
粉つぽき赤子の顔や小鳥来る
月光の額は賢さうに見ゆ

秋風や父に用なき備忘録

— 「俳壇」 九月号より —

南方に父の青春棕櫚の花

徴兵制なき世にひらく花火かな

白玉や女は老後いきいきと

箱庭の山河を覆ふ父の影

向日葵や砂にまみれし子を洗ふ

父の歩は手摺伝ひに竹風鈴

味付けの大雑把なり海の家

会はざれば平らな日々や釣忍

窪みたるところは密に大花野

一番の子がはねてゐる運動会

流木は筋をあらはに秋の雲

稲の花戸主は九十五歳なり

空作品抄 — 柴田佐知子抽出

他愛なき母との会話小鳥来る

高倉 和子

夏風邪のいよよ妖しき瞽女のこゑ

中田みなみ

黴の世の生ある限り生を詠む

荒井千佐代

しかうしておのが重さに桃傷む

服部 早苗

小児科の出窓に久し金魚玉

柴田志津子

写真など捨ててしまへと蚯蚓鳴く

だいじみどり





蟻螻の柱沸騰してゐたる

しやらくせい麩喰ふに銀の匙

白も又燃ゆる色なり酔芙蓉

鬼灯や実らぬ恋は色褪せず

帰省子の校歌の山河仰ぎをり

花氷みんなが触はりつるんつるん

病人はみな仲良しや鳳仙花

山々に雲のまたがる九月かな

かなぶん飛ぶ拋物線の半ばより

起き上がる無数の眼毛虫焼く

富士快晴三日三晩の梅むしろ

甚平や運転免許返上す

かたつむり展望台に置いて行く

原 友子

田岡千章

宮井知英

あさなが捷

矢野百合子

秋 千晴

高倉恵美子

亀井紀子

鳳 蛮華

吉田 菫

野畑さゆり

長 憲一

苑 実耶

直会の男等去りし後西瓜

夕顔のひらく時刻にゆきあはず

校長の庭の毬栗ころがり来

寝返りを打ちても故郷遠蛙

蝋燭が獄卒照らす暑き夜

百年の梁より大蛇落ちたると

大雨の夜の鈴虫が沈黙する

蟬しぐれ国破れし日遠くなり

病持つそれぞれに秋深みゆく

顔あげて胸より走る蜥蜴かな

櫛塚の薄暗がりや水澄めり

名月へ大橋長き脚おろす

炎昼の丸き影より吾が手足

山内 碧

松田 明子

小林 朱夏

樋口 みのぶ

栗原 京子

田代 貞枝

吉村 摂護

山田 正子

安武 晨子

青木 朋子

古川 夏子

織田 高暢

田岡 千章



われのみに開く花火と思ひけり

白粥に朝顔の紺咲き揃ふ

腰までを水にあづけて鮎を釣る

単帯こゑに魔性のありにけり

原子炉へ道しらじらと夾竹桃

兄嫁はいつも小走り萼の花

大の字になれば昭和の夏座敷

あめんぼの高さすなはち水の嵩

鬼は子が泣くまで荒ぶ村まつり

カーテンで仕切る病室夜の長し

微睡の蟬の羽ばたきにて目覚む

棒一本蜘蛛の困払ふために置く

片方は聞き流す耳涼新た

矢野百合子

戸栗末廣

松田明子

原友子

柴田志津子

宮井知英

白水良子

鳳 蛮華

秋 千晴

田代貞枝

山内 碧

安武 晨子

小林 朱夏

日傘まはしこどもふやさぬおかあさん

こつぺばん三つもらひし梅雨出水

太き字の旗につられて氷菓食ふ

鯖雲や水城の跡に水はなく

空爆のあとをたどれば麦の秋

もの忘れ気づかぬふりや零余子飯

クローバの広つばありし頃の友

卵かけ御飯の光る朝の風

ひらひらと開演前の扇かな

鳴らぬ日の軒風鈴に掌をかしぬ

朝の川床あつけらかんとしてゐたり

浦ごとに祈りの御堂いわし雲

秋暑し繩の朽ちたる猿田彦

乾 有 杏

吉 田 菫

長 節 子

亀 井 紀 子

犬 丸 勝 子

野 畑 さ ゆ り

苑 実 耶

山 田 正 子

栗 原 京 子

石 川 叔 子

池 田 華 甲

中 原 俊 之

あ さ な が 捷



深林のここから黄泉へ女郎蜘蛛

東口徒歩三分のかき氷

藍扇子ジーンズポケットよりのぞく

負ひし背に確かな寢息原爆忌

鎌倉へ行く白日傘買ひにけり

見付け出す書簡の黴もなつかしく

炎昼の雀一羽がベランダに

日盛りや道のみ見つめ坂登る

冥府より戻り来りてかき氷

亡き父の農作日誌秋はじめ

夕焼けや良寛さまと又明日

草原に古代の巨石夏深し

病室に西日の窓やただ眠し

片田 きく

今井 春生

青木 朋子

仲里 奈央

ふじの 茜

小川 涼

遠山のり子

清水 量子

古川 夏子

山口 弘子

岸 千手

堀川 征孝

神谷 耕輔

空作品評

柴田佐知子

他愛なき母との会話小鳥来る 高倉 和子

母と娘の会話は、大方はこのようなものである。しかしここには些細だがかけがえのない幸せな時間がある。そう思わせるのは取り合わせた季語の「小鳥来る」によるものである。作者の思いは季語に託されている。

しかうしておのが重さに桃傷む 服部 早苗

さて、ここで気になるところが「しかうして」であろう。意味がないと思う方も居られるかもしれない。しかし俳句は意味だけで作るわけではない。調べや味わいなど、言いたい感覚によって言語が選ばれてくることもある。熟れた桃の甘ったるい官能的な香り。「おのが重さに桃傷む」という見事な措辞もさることながら、「しかうして」というゆるやかな調べが、どこかあやうく濃密な桃の本質に揺ら

ぐように迫る。久保田万太郎の芸を思わせる表現力だ。

蠓まぐをの柱沸騰してゐたる 原 友子
単帯こ糸に魔性のありにけり //

一句目の蠓はユスリ蚊の一種の細かい虫。へまくなぎの阿鼻叫喚をふりかぶる 西東三鬼と詠まれたように、人の顔のあたりに群れなし、しつこくつきまとう。目に飛び込んできそうで呼び名の「めまとい」に納得する。蚊柱のように乱れ飛び群れる蠓の描写として、「沸騰してゐたる」との思いがけない措辞が絶妙にしている。これは一瞬にして浮かんだ表現ではないと思う。じっくりと見て、その状態を伝えるために、考え抜いて言葉を選択した作者がこの句の後ろに立ちあがってくる。

二句目は、艶っぽい女性であろう。ここでも「魔性」という、使うとわざとらしさが出がちな言葉がうまく生かされている。「こ糸に」という限定によって、奇に傾くぎりぎりで止まっている。

(以下略)